№３８

芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆　着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町２－１４－３
TEL072－681－8870

発行日＊＊＊2009年10月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

母に優しい息子・父に優しい娘

男と女は互いに理解できないから相手の言う事を聞くふりをする。これが男同士、女同士であるとわかる故に妥協しにくく言い争いになる。

私は、女気といえば母親だけという殺風景な山間の僻地で生まれ育った所為か女性に対しての知識がまるで無かった。小説にでてくる主人公の言葉を鵜呑みにして現実に生きている女を知ろうとはしなかった。確かに田舎の学校には女生徒が多くいたのだが、親しく話をすることはなかった。男尊女卑的な封建思想が幼心に影響を与えていたためか、生来の恥かしがり屋の性格の為か好奇心は旺盛に渦巻いていたのだが習得する機会を得なかった。

ある時、男の同級生が幾人か集まった席で私が「先生が少しでも女性について教えてくれちゃとったら、人生をもう少し上手くやれたかも…」と言ったら同席していた立木君が「ほんまやで、どうでもよい授業より、それの方が大事やわ」と言葉を続けた。もうひとりの片山君も同感の表情である。私は意外であった。彼らには姉がいて充分に女の習性を学習していると思っていたからだ。彼らの口からは私と同じように女についての不可思議な悩みが出てきたのであった。こんな愚痴を聞いていた先生は「そんな事言っても無理やわ。わしかて、わからんと苦労してきたんや」この言葉でこの会話は途切れた。

近年、母親を介護する友人が増えてきた。息子が母親を看る場合には殆んど苦労話とか愚痴は会話に出て来ない。むしろ、何がしかの生き甲斐や喜びを感じさせてくれる。逆に息子が父親を看ている場合は愚痴がでる。娘が母を看ている場合も同じであるようだ。

妙な話だが、婆ちゃんと男の子の孫はわりと穏やかだが女の子とはキツイ言葉のやり取りが多いと聞く。

男と女の間の不思議で理解できない壁は不幸の元にもなるが、理解できない事からくる「相手を許す許容世界」を作り出し互いを妥協させる効用があるのだろう。

理解できない腹が立つ人間関係が多い昨今であるが、相手を無理に理解しようとせず妥協しやすい理解不能な余地を残しておくのもいいのかも知れない。

連載　爺捨て山⑪

梵店主

「金がない！」という妻の言葉ほど男を萎縮させるものはない。

結婚以来数十年、毎日のようにそう言われ続けると男の気概も萎えてしまう。男が弱くなったと言われて久しい。その原因を深く追求はしてこなかったが、思うに、男達は諦めてしまったからではないか。いつの間にか女に負けることで家庭の平安を維持できると多くの男は思い込んだ。

しかし、男は生まれてから死ぬ迄「金」に追いかけられ逃げようにも逃げられない訳だ。自分は頑張っていても妻から「ない！」と言われ、金を追いかけてきた。せめて死に際は解放され死期を悟った最期の年月を自由気ままに人目を気にせず山奥で暮らして死にたいものだ。ゆめゆめ葬式代如きつまらぬ事で悩みながら死ぬことが無いようにしたい。

その為にも男の復権はどうしても必要だ。強い男とは、自分で決断できる男だ。妻の顔色を伺わないと決められない男は情けない。毅然とした男になりたい。

爺捨て山に行って男の権威を取り戻す術を考えるか、男の権威を表明して爺捨て山に行くか。簡単には決めかねる問題だ。これから自分と問答をせねばならない今の時代の５０男の課題である。

連載小説◆負けるな！よっちゃん33

風神の聖岳　5

梵店主

夜の十時前に、山猿の生家に着いた。玄関を通り居間へ急ぐ彼に従いよっちゃんは、親爺さんの前に出た。よっちゃんが何か言おうとしたときに「まあ、一杯如何ですか」と盃を差し出され「ありがとうございます」と言いながら酒を飲んだ。幾盃か続けて飲み緊張した気持ちが急に緩み空腹感が襲ってきた。

食卓には信州の山菜料理が用意されていて「ふき味噌」という蕗の薹を味噌で炒めた珍味で酒のあてにもご飯にもよくあった。食べる事に夢中になったよっちゃんは、とうとう親爺さんに遭難事故の申し開きをせずに寝てしまった。

翌日、山猿はかかりつけの医者に見てもらい、外傷はあるが頭部の異常はなく一安心したので、長野市内を案内してくれた。善光寺の胎内巡りも体験してすっかり元気になった。

遭難事故の当事者になったよっちゃんは、山の恐ろしさを改めて思った。滑落の瞬間、少しでも衝突する所が違ったりしたら死んでいたと思われる。

山猿も医者にかかり精密検査を受けたが脳出血などもなく遭難事故としては少さな事故で済んだ。山猿が事故を回想して語る状況はよっちゃんとはかなり違っていた。

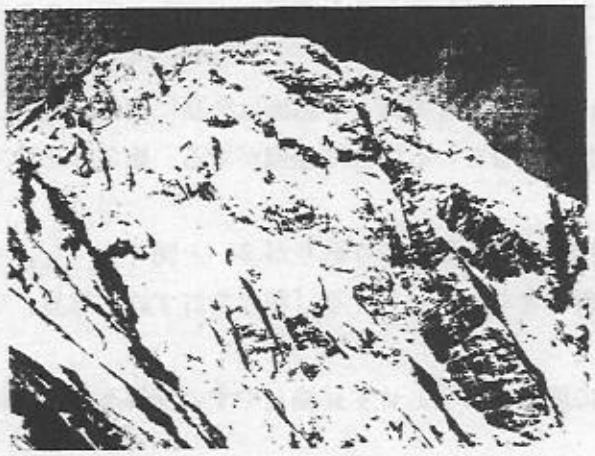
山猿は、アイゼンを氷雪面で滑らし滑落し出した時には落ち着いていて、ピッケルでストップをしようと考えていた。滑るスピードが上がっても彼はほとんど恐怖心を感じなかった。山猿が二十メートルほど滑落してよっちゃんと衝突した瞬間よっちゃんの顔をはっきりと見た記憶があるという。

その後飛ばされて回転して落ちながら臨死体験ともいえる映像を見る事になる。幼い時から成人になる過程までの自分の姿を一挙に映画を見るように見たと言う。その映像は実にはっきりした映像であったと言う。

一方、よっちゃんは山猿を止めようとピッケルを雪面に差し込んだとこまでは憶えているが、次にストップ態勢で雪面に差し込んだピッケルにしがみついている自分に気がつくまでの記憶は無い。よっちゃんは臨死体験をしていないことになる。不思議なことであるが、死に行く危険性は二人とも同じようにあった。どちらかと言えば、落ちてくる山猿より止めようと下で待ち構えるよっちゃんの方が危険度は高い。

物凄いスピードで滑り落ちてくる山猿を体当たりして止めようとした。玉突きのようによっちゃんが飛ばされてしまう可能性は極めて高かった。それにも拘らずよっちゃんは山猿のように死にいく人が見ると言われる映像を少しも見ていない。

よっちゃんは、必死に落下してくる方向に駆け寄り滑り落ちてくる山猿を止めんが為に、木製のピッケルで雪面に突き刺し前屈みの姿勢を崩さなかった。山猿のスピードが余りにも速くて何も考える余裕がなかったが、恐怖心を押し殺して立ちはだかった。怖かったが、見殺しに出来ないという心意気がそうさせていたのだ。とりわけて勇気や技術があるから行なった行為ではなかった。



しかし、そんな瞬間にも山猿は落ちながら冷静であった。落ちて死にいく恐怖は少しもなかった。不思議な事である、恐怖の代わりに生まれてから現代までの自分の姿を克明に見た。よっちゃんと山猿は全く違う思いでいたのである。

山猿が恐怖を感じたのは、よっちゃんと衝突し緩斜面に飛ばされて停止した後、ズルズルと滑り始めた時であった。それまで何も感じなかった恐怖心が一度に強烈に襲ってきた。人の心とは不思議なものである。

仮に、山猿がよっちゃんと衝突することなく数百メートルの断崖を落下して死亡したとしても、我々が想像するような恐怖心を彼は感じていなかった可能性がある。

よっちゃんは数秒の出来事ではあったが、ピッケルが折れたお陰で、全く怪我をすることも無く助かった。木製のピッケルが衝突の衝撃を吸収して折れたお陰かもしれない。もしも今流行の金属性のピッケルであれば、折れることなく滑落死したかもしれない。

山登りには、生死を分ける選択がある。あの時、あの判断が間違っていなければ…。結果から言うのは容易いが、その場で求められる瞬間の判断は迷う時間も無いほどとっさの行動が求められる。

出家4

上原むつえ

報恩閣を飛び出した私は、行くあても無く横須賀の駅から富士市にある大淵村の父に電話をかけた。

「何処にいる？　動くなよ。今から行くから」と電話に出た父が言った。

「世田谷へ電車で行くから、世田谷駅で待っているわ」と私は答えて、電話を切った。

横須賀から二時間ほど電車に乗って世田谷駅に到着した。暫くして父がトラックで御殿場を経由してやって来た。電話をしてから約三時間、飛ばして来たに違いない。父は私に下駄を買ってくれたり今夜泊まる宿を手配してくれたりした。父は私が実家に帰ることを嫌っている事を承知してくれていたから、私の生活の世話をしてくれるように実家の女中のおばちゃんを一緒に連れていた。

旅館で私の話を聞いた父は、早速翌日に世田谷の駅近くで売りに出ていた五十坪の土地と二十五坪程の空き家を買ってくれた。

住む家も決まり、私は本格的に日蓮宗の勉強をする為に本山の池上本門寺の講習会に行く事にした。

父は、おばちゃんが退屈しないように当時では珍しいテレビを持って来ていた。おばちゃんとの二人の生活が始まった。掃除や食事の世話をしてくれるので、私は勉強に集中できた。

家の隣に大変大きな養鶏場があった。そこの爺さんが私に興味を持って話しかけてくる。八十歳ぐらいの爺さんだ。「どうして、若いのに尼僧になったのか」と聞く。

暇な爺さんの話の相手をしたり、爺さんの便秘を治療したりすると、後で卵をくれた。当時は物価統制で物資が不足し、卵が一個二十八円もした。売り物にならない小さな卵を毎日四十個もくれた。横浜から兄弟で世田谷に来て養鶏場を始めたという。それは日本で初めての鶏舎で、大成功をおさめたそうだ。その息子の嫁も爺さんの話相手を私に頼みに来たので、毎日午前中は相手をしていた。

不思議なことに、近くにある五階建てのアパートの住人達が、私が卵をもらっている事を知り売ってくれと頼まれたので毎日売って生活費に充てた。父は生活費として五千円を毎月送ってくれた。

私は、池上さんに通う途中にある空き地を見て、買うことを思いついた。場所は松陰神社の隣の土地である。神社の隣にある為に安い。買い手がいないからだ。

ある時に、爺さんの息子の嫁が来て「うちの爺さん、いつ亡くなるだろうか？」と聞くので「身延山の七面山に聞きに行けば」と答えると「お手当てを出すから、聞いてきて」と頼まれた。仕方なく身延山に出かけた。たまたまその日、九月十九日は七面大明神大祭で人出が多くてお参りしたのだが肝心の事を聞くのを忘れてしまい、山を降りてきた時に気がついた。困って立ちすくんでいると、夢を見るように七面大明神が現れたので、爺さんのことを聞いたら「今月の九月三十日の正午十二時に亡くなる。」と言うと、七面さんは消えた。

帰って、夢でみたままのことを嫁さんに伝えた。爺さんは元気にしていたが、九月三十日になって寝込み、私や家族が見守る中ちょうど正午に亡くなった。私は爺さんの遺体を湯船で洗い着物を着せてあげた。喜んだ嫁さんは私に、お礼として五万円もくれた。

爺さんが亡くなってから、卵をもらうことも無くなったので、生活費を稼ぐ商売を考え始めた。

そんな或る日、家のテレビが故障して電気屋に修理を頼みに行った時に、私は電気屋さんに聞いた。

「私が出来る商売がある？」と、若い尼僧の私が聞くと。「私の兄が成城学園前で背広の仕立て屋をしている。紹介状を書くから行ったら」と親切に言ってくれた。早速行くと明日から雇ってくれるという。池上さんへは三時半から行かなければいけないので、朝八時から二時まで働くことになった。

そんな幸運に恵まれて仕立て屋で働いた。その店で私は、服の仕立ての技術や商売のやり方を少し勉強したのである。

当時は終戦直後で物資が不足していて、衣服なども修理して着ていた。特にファスナーはすぐに故障して取替えの客が多かったので、私はシャツや衿、ファスナーの取替えをする店をはじめたのである。

例の空き地を買い商売を始めることにした。世田谷の五十坪を売り松陰神社の空き地を買った。土地は三十坪と狭いのでバラックを建てて服の店を始めることにした。

中国回遊

主人に先立たれた寂しさに沈んでいた私を、周囲の人たちは何かと気づかってくださいました。そんな私に、旅好きを知ってか、、中国旅行のお誘いがあったのです。

中国と日本は長い間戦争をしていました。戦争中は両国ともに多くの人々が命を落とし、また戦争が終わってもたくさんの同胞が大陸に取り残されたままでした。いわゆる「残留孤児」といわれる人たちです。とりわけ旧満州の東北地方には犠牲が多かった。

東北地方は、日本人が引き上げたあとどうなっているのか、ということが、本願寺宗門内でも、心痛の種になっていたのです。

昭和四十七（一九七二）年に田中角栄首相によって日中の国交が正常化されると、東北地方の現状を実際に見てみたいという要望が宗門のなかでつよくなります。数年後、一般の人々の交流がゆるされるようになるころ、本願寺内で視察団が結成され、中国訪問が実現します。

戦前に満鉄に勤めていた実家の知人から満州の話を聞いておりましたので、ぜひ訪れてみたいと思っていたのです。私の希望は、本山の重役をしておられた方の推薦によってかなえられ、視察団に加えていただきました。三人のお友だちも同行することになりました。

まず、首都北京に飛びました。そのころの北京は街路燈があまりなく、夕闇にだだっ広い空間が広がっている、という印象です。

北京から汽車で一路北へ、遼寧省の省都瀋陽に向かいます。瀋陽で、長春を訪れたい斑、大連を訪れたい斑、瀋陽に残る斑に分かれて行動しました。長春は旧満州国の首都だった市で、当時は新京と改称されていました。大連は戦前日本の関東州という租借地だった港町です。

北京の天安門広場

私は瀋陽に残り、幼稚園を訪れて子どもの教育現場を参観し、中国の幼児教育のありようを見聞きしました。また、戦前に日本人が暮らしていたという市街地にも足を運びました。そこに住む人たちのなかには、私たちに会って、「日本の人たちが懐かしい」と涙ぐむ人もいました。「日本と戦争をすることになったのはたいへん残念だ」と私の手を握る人もいました。こんなふうに日本人を思っていてくださる方が中国にはおられるのだということに驚き、しみじみと考えさせられました。思いもよらない感慨無量のひとときを過ごしました。

戦前には多くの日本人が暮らしていた大連から帰ってきた人たちも、言葉にならない苦悩に満ちたような面持ちでした。

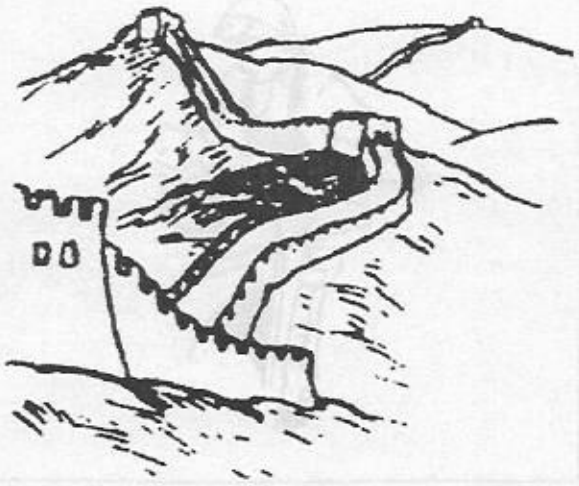
翌日は長春を経由してハルピンを訪れました。戦争末期、北の方から逃げるように引き上げてきた人々が教室に集結したのですが、そこでたくさんの人が亡くなったそうです。近くの空き地に大きな穴を掘り、亡くなった人たちを埋葬したということでした。話すも涙、聞くも涙で、私たちはみなで黙祷礼拝をささげました。

ハルピンの市街を観光したあと、アムール川支流の松花江を遊覧しました。驚いたことに、向こう岸がかすんで見えないほど川幅が広いのです。日本にはこんな川はありませんから、大陸の自然は規模が違うということにただただ驚くばかりでした。

夕闇迫るころ、駅に集合し、張家口に向かいました。ここはちょうど北の遊牧民族との境界にあります。万里の長城の大門や古城を見学しました。万里の長城は、えんえんと西に八〇〇〇キロ以上もつづくというのですから、規模が大きいのは自然だけではなく、人工の建造物も桁外れです。

第一回目の中国旅行は東北地方でした。中国はたいへん広いです。中国旅行のお誘いが次から次へとあります。これまでに五回訪れました。

中国最初の統一王朝、秦の都咸陽には始皇帝の御陵があります。御陵をお



参りし、周りにある兵馬俑坑を見学しましたが、その大きさに圧倒されました。遙か彼方には万里の長城を望めます。

秦、漢、隋、唐という古代王朝の都城として栄えた西安にも訪れました。千年もの歴史をもつ西安には古い遺跡がたくさん残っています。規模の大きさだけでなく、古い文化にも触れることができました。日本は、昔から中国から多くのことを学んできたのです。

中国には仏教遺跡もたくさんあります。仏教は、お釈迦さまのインドからシルクロードをとおって中国に伝えられました。シルクロード沿いには仏教遺跡が残っています。代表的なものはオアシス都市、敦煌が有名です。私は念願の敦煌を訪れ、莫高窟を見学しました。日本の仏さまとは趣の異なる西域の仏さまにすっかり魅入りました。

四川省の重慶、広西の桂林にも足をのばしましたが、中国にはまだまだ行ってみたいところがあります。何度でも訪れてみたいところもあります。

仏教は、インドから東南アジアにも伝えられていきます。タイ、ベトナム、インドネシア、カンボジアなどの国々にも仏教遺跡が残っています。この東南アジアにも私は、友人を誘って、足を運びました。次回は東南アジアの遺跡巡りをお伝えします。

西郷さんの家

今、私はしみじみと西郷さんの家の写真に見入っております。そして限りない感銘を受けております。折悪しく目イボか何かできちゃって字もまともに書けません。しかし、すぐに治るでしょう。この家の写真はいつ見ても、幾ら見ていても飽きません。誰が建てたのでしょう。貫禄充分ながら素人のような気も致します。素朴な中にも何か胸打つものがあります。一人暮らしの小屋とも見えて、これで二部屋もあるとのことです。ともかく一度見て下さい。ひたすら「感銘」の一語につきます。良いものを見せて頂きました。心まで洗われます。名実共に立派な邸も館もあります。それはそれで良い事です。でも時には、こういうものに感動するのも嬉しい事ではないかと思います。「文明とは道のあまねく行わたることなり」。西郷さんの言葉です。いつの世にも尊敬に価する立派な人がおりました。（美樹）

「水のように」

観葉植物を育てていて感じることの一つは、命の不思議さである。植物は、水だけで生きられる。私の机の上にエアープランツを置いている。この植物は、水やりをしなくて良いし、土も要らない。空気中の湿気を吸って生きている。

人間にもそんな人がいる。新潟に住んでいる山田鷹夫（五八歳）という人は震災がキッカケで、水だけで生きれるようになった、という。その人が『不食実践ノート』（三五館、二〇〇六年七月刊）という本を出しているので、買って読んでみた。その中で医者と次のように対談している。

山田氏「どうして食べずに生きていけるのか、自分でも分からない。なぜですか」

医者「腸内の微生物がタンパク質を生み出しているか、もしくは体内で原子転換が起きてエネルギーが出ているのではないか」

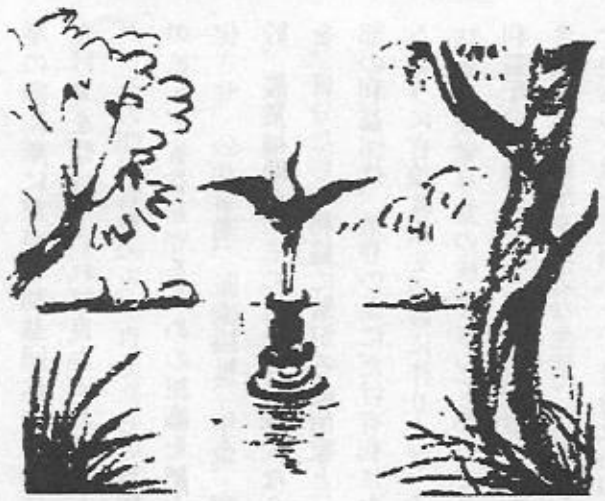
その医者も少食主義者で、食事は一日に一回しかしない。

「人間は水だけで五〇日くらいは生きていける。だから山で遭難しても慌てることはない。冷静に行動すれば数日で人里にたどり着けるから」と常々、思っている。

また、たまに断食するのは健康に良い、とも聞いていた。

そこで山田さんの本に触発されて、私も減食を試みた。一六年間、痛風を病んでおり、痩せる必要があったからだ。急に絶食すると体に悪いので、朝は納豆だけ、昼はヨーグルトだけ、夜はいつもどおりの晩酌と食事にした。五日間ほど続けてみた。体が軽くなって、気分は爽快だった。

ところが、困ったことが起こった。極度の便秘になったのだ。食べる量が少なくなったため、毎日、便意を催さないし、催したと思ったら、便が硬くてなかなか出ない。



そこで山田さんの本をもう一度、読み返してみた。すると、この人は、定期的に水で腸を洗い流していた。そこまでするのも面倒なので、減食は止めた。そして、凡人にはとても山田氏の真似は出来ない、と悟った。

しかし、山田氏の例を見ていると、昔から言われいる「仙人は霞みを食って生きている」と言うのは、まんざらの嘘ではないのではないか、と思った。動物であれ、植物であれ、突き詰めれば、命は水で出来ている。

「水のように、素直に流れていくのか、自然な生き方なのかも知れない」そう考えると、なんとなく、気分が楽になる。（龍）

＊あなたの心のつぶやきをお寄せください

サラリーマン・エッセイ⑲

「政治が変わるかなぁー」

明石幸次郎

鳩山民主党内閣が発足して、脱官僚、政治主導で「政治、政策不況」と言われた現在の閉塞的な社会的、経済的な停滞をどう打破するのか期待がもたれています。読売新聞の世論調査でも内閣支持率が七十％を超えて、国民の期待度の高さを示しています。

鳩山首相を始め、各大臣等のテレビなどでの発言を聞いていると、これまでの自民党政治家に強く感じた、何を言っているのか良く理解出来ない、日常会話的表現でない政治的役所的表現で慣らされていた国民にとって、普通の表現で普通に話しをする民主党の閣僚等に対して、新鮮な驚きを感じました。本来、民主主義国家の政治家は、国民に分かりやすい言葉で説明し、理解をさせ、国民の合意を得て、政策なりを遂行するのが、国民から選ばれた職業人としての政治家の仕事であります。民主党政権になって、政治家が本来の仕事を実行しようとしている姿勢に、国民に対する責任感と誠実さを感じさせます。

先日、ＮＨＫの番組で民主党政権になって、どう日本が変わるかをテーマで色んな分野の視聴者がスタジオで、質問をして、それを内閣府副大臣の古川元久（旧大蔵省出身三十歳で衆議院議員初当選、四十三歳）、大塚耕平（日本銀行出身、五十歳）両氏がその質問に答え、民主党としてこれから、問題をどのように解決していくかの政策を述べていました。ご覧になった方もおられると思いますが、選挙区が関西でなく愛知県選出のためか、単に私が知らなかっただけか、古川、大塚氏の顔も名前も知らなかったのですが、視聴者の多方面に亘る質問に対して、的確に、かつ問題を逸らさず、専門用語も出来るだけ避けて、聞いている者が理解をするように、分かりやすい表現で答えていました。その対応には、この二人の政治家の頭の良さと、勉強して、経験と知識を蓄え万全の準備をして入閣したことを感じさせ、今まで見慣れていた自民党タイプと違う政治家であり、何よりも、何かやってくれることを感じさせました。

従来の自民党政治家は閣僚になれば、官僚にレクチャーされた即席知識と官製の無色透明な作文だけを、さも自分が考えた知識として覚えるだけが精一杯で、それも万年与党の甘えから、大臣になり、その政治権力を使い、より良い社会にしようという職業政治家としての熱情ではなく、ただ一度は大臣になりたいと言う出世欲のみだけでなり、肝心な政策とか答弁などで自分の言葉と知識で分かりやすく国民に答え、国民の民意がどこにあるかを探る努力をも怠って来たような大臣が多かったように思えます。大臣に相応しい見識もなく十分な勉強をもして来なかったのでは、官僚の言いなりにならざるを得ず、官僚に政策までも動かされてしまっていました。麻生前首相の言う「官僚は上手く使うものである」とよく言っていましたが、官僚の方が「政治家は上手く使うものである」と言うのが自民党政治の実態であったということでしょうか。

又、我々国民も政治家とはそんな程度だと馬鹿にしていたし、政治家も、国民は何も理解していないし、理解出来ないと馬鹿にして、国民の声に耳を傾けず、選挙の際に票に繋がる利益団体の業界にだけ耳を傾けていれば良かったのでした。その間、官僚のみが自分たちの権限の拡大と省益を守るための組織を肥大化させ、公共事業、医療福祉、年金、郵貯、農業補助金、その他予算の膨大な金を、自分たちの利益に繋がる政治家と一部の利益団体、業界の為にだけ有利になるように官僚政策を巧妙に作り上げ、それを自民党与党の政策として執行され利益配分を続けて来ました。一般の声なき国民は、政治を身近な生活には関係しないものと距離をおいて、自分たちの

領分を守りさえすれば、生活には支障をきたさないと政治的無関心を続けていました。しかし、小泉政権が推し進めた聖域なき構造改革、規制緩和で経済的合理性のみを優先したため、一挙に今まで覆い隠されてきた業界団体中心の官僚政策が大銀行、大企業、公務員、大型スーパーのような大規模小売業に益々経済的有利に働き、それ以外の中小企業、農林水産業、個人商店、自営業、派遣社員、フリーターなど、政治的影響力のない人達にとって、逆に大きな経済的不利な状況におかれるようになりました。これが好況時には隠されて顕在化しなかったものが、不況になり明らかな経済格差となって一挙に表れました。失業、就職難、賃金格差、年金問題が大きな社会不安と不満となり、政治的無関心を決めていた国民を眠りから覚まし、それが、今回の総選挙で自民党政権を倒す大きな力になったと思います。民主党も何故自分達が政権を獲れたかを十分に分析し、学習して、それを政策に反映して、今まで社会的不利を蒙っていた多くの名も無き国民が安心して生活が出来るようにこれからの政治を行ってほしいものです。

そのためにも、民主党は今までの国交省の技官達と土木屋、鉄とセメント屋それに地元選出の政治家、地元のボスだけが利益を享受するだけの、コストパーフォマンスの取れない無駄な公共事業は徹底的に見直すか中止して、田中角栄政権以来、営々と築いてきた土建国家からバランスの取れた普通の国家への脱却を図ってもらいたいものです。その象徴が八ツ場ダムであり、JALを苦境に陥れた一つの原因となった無計画に造り続けた採算の取れない地方空港の問題、まだまだ作り続けられている無駄な地方高速道路の問題などを前原国土交通大臣がどう対応するかが、民主党が掲げる官僚主導から政治主導への脱却の試金石と思われます。

俳句

直子

○ 秋灯火婚の祝を手作りに

○ 二人居の茶を濃く熱く無月かな

○ 学僧の白き踵の爽やかに

追悼文

「芥川だより」を創刊以来励まし応援してくださった商店街のIさんが九十歳で先日亡くなられました。慎んでご冥福をお祈りいたします。

Iさんは戦争中、インド洋上にあるアンダマン諸島へ派兵された。島に来るはずの日本の輸送船が全てアメリカの潜水艦に撃沈されて物資が届かず、飢餓的な島での食料事情を経験された数少ない生き残りの一人である。島での生活は、敵の攻撃よりジャングルで空腹との戦いであった。

印象に残った話。島に送られる兵士を運ぶ輸送船がいく艘も敵潜水艦の餌食になる中で、Iさん達が乗る船が航海中に島の見える地点にさしかかった時、敵艦より発射された魚雷が水柱をあげながら向かってきた。その時に一緒に乗船していた上官の中尉が一人で魚雷に向かって体当たりして爆破させて舟への被害を防いだ。乗船していた者達は、中尉の死をも怖れない勇気ある行為のお陰で生きて帰れたと言う。また、兄弟が多いために住み込み店員として京都の店へ奉公に出て、店の主人に認められて学校に通わせてもらって勉強された話なども聞いた。温厚な人柄と知的なセンスを兼ね備えた紳士であった。

幾度か、芥川だよりへの寄稿をお願いしたが、体力的に無理だったのか投稿はされなかった。もう少し詳しく話を書きとめておけば、芥川の歴史を綴ることになったと思う。（嘉）

◆芥川だよりから三冊の本が生まれました◆

『瀬戸内に踊る魚たち』

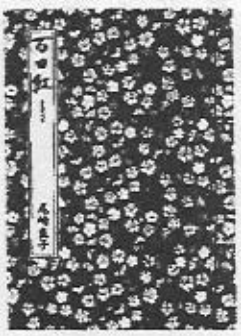
4号から20号に連載された周防春日丸さんの「魚あれこれ」と「釣りいろいろ」をまとめました。

『母の「今は昔、昔は今」』

6号から27号に連載された「山猿の介護日誌」です。

『百日紅　さるすべり』

6号から34号に連載された「江戸っ子エンちゃんの今昔」です。



連載　女８０年の軌跡　眞糀さん

亡くてぞ、今は恋しき

生きている時は、意地悪く、口やかましいと思っていたが、お彼岸にお墓へお参りをするとかえって色々な事が思い出となり、なつかしい気持ちで一杯。ひと知れず涙が頬に伝わってきた。

なんと勝手な自分なんだろうか。静かに手を合わせ反省する気持ちになってしまう。

戦後になってから日本人の寿命が三十年以上も延び、人生五十年が八十年以上となり、たとえ百年になったとしても、長い歴史の流れから見れば短い人生といえるのでしょうか。

彼岸で感謝して過すか、この世で不平不満で送るか。よーく考えて見ねば。

ちょっとした事でいがみあったまま、あいつとは付き合わない。言葉も交わさない。こんな事って世の中には沢山ある。思えば短い人生の中でつまらぬ事にこだわって、にらみあいしているなど情けないこと、勇気を出して早速行って話し合いをしよう、と決心すれば、そこに彼岸があるのでは。

偉そうに自分のみが正しい論理をのべて歩もうとするけれど、そこには他人の努力もあり、お金を出しても売ってくれないものがある。どうすることも出来ないものが横たわっている事を知るべきだと思う。

向こう彼岸へ渡るにも
一足とびにも行かぬもの
せめて一歩一歩づつでも
此の人世
我からはなれて彼岸へ向かいたいもの
迷えば此の世　悟れば彼岸

ああ無情

ピンピンコロリ。長野県の老人達がよく使う言葉。生きている間は元気で、死ぬ時はコロリといきたいという意味。

人生はいつだってこれから。他人と過去は変えられないけれど、自分と未来は変えられると言われるが、ちょっとむずかしいかな。知る、できる。わかっていると言って実行した時に初めて分かったと言えるのではないかな。

自分が変われば周りが変わる。そして未来が変わる、というけれど、新しい自分になるために、さあ変わらなきゃ。八十路を越えて考えることか。

誰だっていくつになっても、悩みはある。それは人生の宿題であると思うが如何。話せば長い話。

ウーンと聞いてくれるけれど回答は出ない。ムリというもの。人の気持ちが分かるはずがないもの。

口が一つで耳二つというのは、しゃべるよりは二倍聞きなさいという事らしい。

男と女のボケ方

呆け方にも男女の差があると言われている。

男がボケた時、最後まで覚えているのが奥さんの声。

女がボケた時、最初に忘れるのが亭主の顔と声。

♪男は、忘れてしまいたい時やどうしようもない時、男は酒をのむ。のんでのんで、のみつぶれるまでのんで……。

女は、そんな時涙を見せる。

泣いて泣いて、一人で泣いて泣いて、泣きつぶれてねむるまで泣いて……♪

泣くことで免疫力がアップするそうです。

女性の方が長生き。百歳以上は、八割が女性。

三つの合い――。
「愛し合い」
「話し合い」
「いたわり合い」
遠い過去の言葉かな…。

編集後記

今年中に「江戸っ子エンちゃん」が本になります。これまで芥川だよりの掲載された文を編集して読みやすくしました。エンちゃんが来年一月に八十八歳を迎えられる祝いに出版される事になりました。

私も大変嬉しくて、お手伝いをさせていただいています。誰かが共感してくれれば最高に嬉しいです。希望される方は知らせて下さい。

芥川商店街催し

秋の売り出し

芥川昔ばなしハッピー・ハロウィン&
わくわくストリート芥川

10月30日（金）～
11月3日（火）

☆

冬物コートお仕立賜り会

軽くて温かい着物地の
洋服をお仕立いたします

11月2日(月)～4日(水)

着物から服を仕立てます

梵～ぼん～

☆　☆　☆